『武家の古都・鎌倉』の世界遺産登録をめざす

神奈川県・横浜市・逗子市の取り組み

逗子市・名越切通の整備

逗子市教育委員会社会教育課　佐藤仁彦さん

今号から、鎌倉市とともに『武家の古都・鎌倉』の世界遺産登録を推進している神奈川県・横浜市・逗子市の行政と市民活動の取り組みについてお伝えしていきます。

初回は逗子市の行政の取り組みについて、逗子市教育委員会社会教育課の佐藤仁彦さんに伺いました。

『武家の古都・鎌倉』の範囲は、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』に、北は山内（北鎌倉）、東は六浦（横浜市）、西は片瀬川（藤沢市）、南は小坪（逗子市）と書かれています。世界遺産登録では、そのうち横浜市金沢区の称名寺と鎌倉市との境にある朝夷奈切通、鎌倉市と逗子市の境にある名越切通や和賀江嶋が含まれる区域を構成資産としています。このため、神奈川県と横浜市・逗子市も早くから、鎌倉市と同様に遺産の研究・保存管理の努力を続け、大きな成果を挙げています。

昭和41年に史跡指定された後、2度の追加指定がなされたほかは具体的な動きのないまま事実上放置されていた名越切通が、ようやく整備の緒についたのは平成8年のことです。この年、切通の一部が崩落したことをきっかけに、逗子市としても改めて史跡の保存活用を図っていくこととなり、その後新たに保存管理計画、整備計画等を策定し、今日まで切通の崩落対策やまんだら堂やぐら群エリアの整備を行ってきました。その間、平成19年度に4県市の世界遺産登録推進会議が発足したことを受けて、世界遺産登録に向けた動向と連携しつつ整備事業を進めています。

鎌倉と三浦半島地域とを結ぶ重要な交通路として鎌倉時代に開削されたと言われている名越切通ですが、それを具体的に物語る史料はほとんどありません。『吾妻鏡』天福元年（1233）八月十八日条に「名越坂」と見えるのが最初ですが、それがどのような構造であったかなど具体的な様相を伺い知ることはできません。同じく『吾妻鏡』仁治元年（1240）十月十日条等の「山内路」（巨福呂坂切通）や同年十一月三十日条等の「六浦路」（朝夷奈切通）の造営に係る記事からみて、名越坂も相前後して切通路として整備された可能性はありますが、名越は「路」でなく「坂」と呼ばれていますので、これを同列に考えるには慎重を期す必要があると思います。

これまでの発掘調査等の結果から見て、名越切通は後世に大きく手を加えられたことが明らかです。今私たちが目にしているのは近世末から近代の姿で、中世の名越切通の具体像はよくわかっていません。しかし、平成21年度に、現道よりも北側の約5m高いところにある平場で、平坦な岩盤面を逆台形に掘り込んだ道路状遺構（いわゆる掘割り道）が発見されました。路面の幅は概ね1m未満と非常に狭いですが、15世紀以前のものと考えられ、複数回修築した痕跡も伺えます。これがある段階における切通の本道なのかどうか、にわかには判断できませんが、中世の名越切通の具体的な状況を考える上で非常に貴重な発見でした。

これまで、鎌倉の守りの要として象徴的に取り上げられることの多かった名越切通が、中世の姿そのものではないとなると、やや興をそがれるかもしれません。しかし、切通路の周辺には、山陵の崖面を穿つやぐら群や遺体を荼毘に付した痕跡など葬送関連遺構のほか、大規模な石切場址である大切岸、人工的な平場も随所に見られるなど、その景観は中世鎌倉の周縁部の姿を髣髴させるもので、名越切通の価値は高まりこそすれ減ずることはありません。

なかでも、約150基のやぐらからなる「まんだら堂やぐら群」は、山陵部のやぐら群として規模も保存状態も傑出した遺構ですが、土地を公有化した平成12年度以降は管理や整備の都合上、僅かな期間を除いてほぼ閉鎖状態でした。しかし、このたびの平成23年度工事でやぐら群前面平場の園路造成や柵の設置が終了したため、3月中旬に早速5日間の臨時公開を行い、来場者からご好評を頂いたところです。平成24年度は公開日数を拡大し、初夏のゴールデンウィークと、秋から初冬にかけての土日祝日に公開できるよう準備を進めています（詳細は決まり次第ホームページ等でお知らせします）。今後は大切岸の安全対策や園路整備工事等を経て、平成26年度中には一般公開に漕ぎ着けたいと考えていますが、管理運営体制をどうするか等、難しい課題も抱えています。

整備中のまんだら堂やぐら群